

鈍彫と未完成像

久野健

寶城坊の薬師三尊像や弘明寺の十一面観音像のように、像の表面に、ごつごつとした丸鑿のあとをのこした、いわゆる鈍彫の像が、初めから作者がこうした像を作ろうと意圖して製作したものか、あるひは、製作途中で、何等かの理由で鑿をおき、そのまま遺つてしまつた未完成の像であるかという問題は、大正年代以來、多くの論説が發表されているが、解決のつかない問題の一つであつた。

私は、この問題を、何とかして解決したいものと考え、從來、鈍彫の研究といへば、鈍彫だけをとりあげて考えられていたのに對し、もつと廣く、東國の古代彫刻全體からみると、鈍彫像というのは、どういう役割を演じているか。鈍彫を未完成の像だとすると、これを完成させたような像が果して残つていようか。また、今日残る東國の古代彫刻中、鈍彫像は、どのくらいの比率をしめているかということに重點をおき、東國の古代彫刻を見てまわつた。

その結果は、鈍彫像のあの丸鑿のあとは明かに意識的につけていたものが多く、決して、未完成のものが、たまたま残つたとは考えられなくなつた。そして、當時の東國人のところには、あの鑿痕のごつごつと残つた彫刻が、すこぶる頼もしいものとして映じ、その發生はたまたま未完成像から出たにしても、次第にそれが一様式として流行し、平安時代から、鎌倉初期にかけて製作されたものではないだらうかと考えるに至つた。その際、鈍彫像が、西は、愛知縣の渥美半島から、新潟縣の絲魚川を結ぶ線よりも以東にのみ分布していることも知つた。以下この線よりも東の地域をこゝでは東國とよぶことにする。

以上のことは、すでに美術研究百八十六號に「關東の鈍彫について」と題して發表したので、再說することを省略するが、その後、この鈍彫像の分布を劃する中部地方を横斷する線は、古く繩文時代より、土器の特色をことにし、ほぼ、この線をさかい目として、東西で土器の様式が著しく相違していること。すなわち、日本の東西はこの線を以て分かれていたこと。また、今日の方言も、ほぼ、こ

の線をさかい目として、關東辯と關西辯とが分かれているということを知り、^{註一}あまりの一致におどろいた。

こうした理由から、わたしは、鉞彫像が、平安時代から鎌倉時代にかけて流行した東國特有の様式であるという確信をいよいよ強めた。また、その後、發表された論說中、鉞彫像にふれたものは、おかた鉞彫像を一樣式と認めたものが多い。^{註二}ところが、昨年（一九五八年）兵庫縣尼崎市の法園寺（猪名寺）の秘佛藥師如來像がたまたま専門家の調査をうけ、この像もまた鉞彫ではないかということがいわれた。^{註三}もし、この像が本當に鉞彫像で、しかも、この地で製作されたものとすれば、鉞彫は、古代の東國人のあらあらしいところを反映した一樣式であるとする自説を訂正する必要があるので、早速調査に出かけた。その結果は、以下詳述するようにこの像は、鉞彫ではなく未完成像とすべきであると考えられるのであるが、前記の論文においては、あまりに鉞彫像を一樣式とする立證に急なあまり、從來から、近畿地方にも鉞彫があるという説に對しては、一つ一つ述べることをしなかつた。そこで、この際、近畿地方にある從來鉞彫ではないかといわれてきた諸像をとりあげ、東國の鉞彫と比較しつつ、これらは、鉞彫とはいいいがたいことを述べ、諸先學の批判をうけたいと思う。

二

從來、鉞彫を未完成像と説く論者が、常にその立證にあげてきた

のは、近畿地方にある次の三件の像である。即ち

奈良縣宇陀郡榛原町大字戒場 戒長寺

藥師如來脇侍菩薩立像 一軀

兵庫縣城崎郡城崎町大字湯島 溫泉寺

十一面觀音菩薩立像 一軀（圖版Ⅱ・a）

滋賀縣愛知郡秦莊町大字松尾寺 金剛輪寺

聖觀音菩薩立像 一軀（圖版Ⅱ・b）

このうち、第一にあげた、奈良縣戒長寺の藥師如來脇侍菩薩像は、鉞彫未完成論者には、最もよい材料であつた。というのは、この菩薩は、中尊の藥師及びもう一方の脇侍菩薩をも具備した、いわゆる藥師三尊をなすもので、中尊の藥師如來像及びもう一方の脇侍菩薩像は、全く完成した姿になつてゐるからである。

挿圖1・a b c がそれで、この三尊は、明かに藤原時代の製作と考えられるが、挿圖1・bの藥師如來像や、挿圖1・cの脇侍菩薩像が全く完成しているのに、挿圖1・aの脇侍の方は、右腕や天衣や裳に、丸鑿のあとがはつきりと残つてゐる。しかも、その丸鑿のあとも、決して亂雑なものではなく、同方向にきれいに鑿が進められ、このためそう敬虔の念を失することもない。そこで、未完成論者は、この鑿痕を指摘し、鉞彫も、決して東國だけのものではなく、しかも、この像と同様未完成品であると説くのである。

私も、この脇侍が未完成のもので、何等かの理由で、完成を見ぬ

挿圖 1.c 脇侍菩薩像

挿圖 1.b 薬師如来像

挿圖 1.a 脇侍菩薩像
奈良 成長寺藏

うちに鑿がおかれ、そのまま今日まで残つてしまつたものであることは、明かなことだと思ふ。しかし、この鑿痕は、東國の鈍彫像のあの意識的なものとは違ふこともまた明かであると考へる。この像では、この稜線をもう少しけつりとれば、全く、挿圖 1.c の脇侍菩薩像と同様になり、それだけに彫りもあさいが、東國のもの古い鈍彫像では、はるかに彫りが深いのである。また、鈍彫像の末期

三

挿圖 2.a 同像部分

挿圖 2.b 菩薩像 愛知 長興寺藏

挿圖 3. a 十一面觀音像
兵庫 温泉寺藏

挿圖 3. b 同 部 分

挿圖 3. c 同 胸 部

に屬する長興寺の菩薩立像（挿圖 2. a b）等と比較しても、鑿痕を意識しているかどうかという點で大いに違うものがある。こうした像こそ未完成像であつて、東國の鉞彫と同

一視することは誰の眼にも出來にくいのではないだろうか。

鉞彫未完成論者の一人である明珍恒男氏^{註四}により有力な例の一つとしてあげられたのは、城崎温泉寺の秘佛十一面觀音立像である（圖版Ⅱ. a）。

この像（挿圖 3. a b c）は、ヒノキ材の木彫で、像高一九五・四釐頭部から足まで同木から刻み出している。但し、頭上の十一面は植付、兩耳上の化佛は後補、その他も像と同時かどうかは疑問である。右腕の中程、及び手首を別木を知ぎつけ、右手肘のなかばで

挿圖 5. 十一面觀音像の胸部

群馬 日輪寺藏

挿圖 4. 十一面觀音像の胸部

神奈川 弘明寺藏

また知り天衣は後補である。また足先や持物は後補である。こうした造像法から見ても、堂々とした體軀や、裳に見られる翻波式衣文からしても、まづ十世紀は下らぬ頃の遺品と考えられる。さて、この像で明珍氏が、注目したのは、この像の全面にわたつて、丸鑿のあとが明瞭に残つている點であつた。この像の丸鑿のあとは、かなり、韻律的な調子で残つており、東國の鉦彫の丸鑿のあとがきわめて一見規則的に刻まれているのと類似している。これを明珍氏は木彫家には、それぞれの鑿の使い方に癖があり、荒彫や小作の際には、横縞目にあるひは檜垣目に鑿痕が出来るのが普通で、温泉寺の十一面觀音像は、未完成のものである事は明瞭であるが、東國の鉦彫も、これと同様であると説くのである。

私は、東國の鉦彫像の寫眞を携帶してこの像の前に立ち、比較検討したが、これまた著しい違いがあると感ぜざるを得なかつた。挿圖3・cは、この温泉寺の十一面觀音像の胸部であるが、これを、同様な像様をもつ、弘明寺の十一面觀音像(挿圖4・a)や、日輪寺の十一面觀音像(挿圖5)に比べると、その點は明瞭であろう。すなわち、温泉寺の十一面觀音像は、もう一步鑿を進めれば、まさに十世紀頃の典型的な素木像系の十一面觀音像が出来上ると思われるが、弘明寺像や日輪寺像では、この鑿痕の所をけづりつつてしまふと、直ちに典型的な十一面觀音が生れるとは考えられないのである。これは、決して、製作工程が、温泉寺像のが、弘明寺像や日輪寺像よりも進んでいるためではない。弘明寺像や日輪寺像の鑿痕の

稜線をけづりつつてしまつたならば、あまりにやせた像になつてしまふであらうと思われるのに對し、温泉寺像では、この稜線をおとして丁度いい具合になるのである。つまりどう考えても、初めから、兩者は、完成の意圖が違つていたとせざるを得ないのではないだろうか。それ故、温泉寺の場合には、戒長寺の脇侍菩薩像同様、鑿は浅く入れており、弘明寺像や日輪寺像では、鑿を深く入れ、鑿痕を誇示しているのである。さらに弘明寺像や日輪寺像は、これをもつて完成とした證據に、その表面には、素朴ながら胸飾がはつきりと描かれているが、温泉寺像には、勿論そうしたあとはない。

さて、最後の金剛輪寺の本尊聖觀音立像も、誰がみても一見して未完成と思われる像である。この像はヒノキの一木彫であるが、一〇三・五種の小像で、左手の肘から先と兩足が後補、右手先も、一度折れたのをついでのいる他は、おおむね完全な姿に残つている。臺座以下は無論新補のものである。

挿圖6・a b c d にかかげたのが、金剛輪寺の聖觀音像であるが、この像では、今まで見てきた戒長寺の脇侍菩薩像や温泉寺の十一面觀音像とは鑿痕が大變違い、おおまかな、荒ぼいけづり方をしていゝる。この像がまた未完成品であることも、疑う餘地がない。この像の、荒つばい鑿痕は、まさしく、東國の妙樂寺の毘沙門天像(挿圖9・a b)や東觀音寺(挿圖8・a b)の二天像等に、かなり似かよつていゝるが、しかし、著しい違いもある。それは、妙樂寺像や東觀音寺像が、もうそれ以上、ほり込む餘地がないのに對し、金剛輪寺の像で

は、充分に肉が残っており、まさしく、この彫刻は、これからという感じを誰にも與えるところにある。いまこの像を、大きさや像様の點で、かなりにかよっている寶城坊の藥師如來の脇侍(挿圖7)と比べてみれば、明かである。金剛輪寺像においては、體軀は勿論、腕や手などにも、肉がたつぷりと残っていて、これからほりこんでゆく餘地が充分あるが、寶城坊の藥師如來脇侍像は、そうした餘地は、すでにないことが分るであらう。

以上のような理由から金剛輪寺像は、とうてい鈍彫とはいへない

未完成の像とすべきであらう。ただ、私が、この像を調査した時に、感じたことは、この觀音立像は、その顔がすでに禮拜の對照として、最少限のところまでは、出来上っているのに對し、體軀や、腕が、著しく工作がおくれているということであつた。さらに金剛輪寺の規模の大きさや他の諸佛像の優秀さから考えても、未完成像が、本尊となつているのは、何等かの理由があるのではないだろうかということである。

この際、思い出されたのは、木下川藥師佛緣起に出ている話であ

挿圖 6. b 同 斜 面

挿圖 6. a 聖觀音像側面

挿圖 6. d 同 背 面

挿圖 6. c 同 斜 面

挿圖 6 聖觀音菩薩像

滋賀 金剛輪寺藏

挿圖 9. a 毘沙門天像頭部

挿圖 8. 二天像 愛知 東觀音寺藏 挿圖 7. 脇侍菩薩像 神奈川 寶城坊藏

つた。すなわち「傳教大師彫刻の日、像成つてまだ像腰を完成するに至らなかつたが、而も已に靈異具はつて更に彫琢を煩はさず、乃ち其の施工を中絶し、錦綉もて像腰に纏た」という話であつた。

この文献は、かつて、東國の鈍彫を未完成と見る學者により、半作で、鑿をおいた例の一つとして指摘されたものであるけれども、まさしく、金剛輪寺の聖觀音像などには、こうした高僧による、一夜作りの例なのではないだろうかという感じを興える。お顔の作りのみ進み、體軀や腕等が、いかにもそれに比べて工作が進んでいないということも、すでにこの状態で、靈異が具はつたからなのかも知れない。この小像が、金剛輪寺のあの巨大な本堂の本尊としてまつられているのも、由緒ある高僧の手になるためなのかも知れないと思うのである。もし、この推測があたつていれば、あるいは、この作者は、初めから、この程度の工作をもつて完成と見たかも知れないが、この場合は、全く特殊な例とする他はない。ただ、もし、遊幸の僧により、こうした半作の像を作ることが行われていたとすれば、東國の鈍彫の起源に對し、ある種の暗示を興えるのである。

b 同 腰 部 挿圖 9. 毘沙門天像 千葉 妙樂寺藏

ないが、この場合は、全く特殊な例とする他はない。ただ、もし、遊幸の僧により、こうした半作の像を作ることが行われていたとすれば、東國の鈍彫の起源に對し、ある種の暗示を興えるのである。

挿圖 10. a 聖觀音像 上半身



挿圖 10. b 同腰部 聖觀音像

滋賀 櫛野寺藏
測を強くおしすすめるには、この金剛輪寺の像は、あまりに製作年代が下りすぎているきらいがある。この像は、その優しい顔付からしても、どうしても、藤原時代後半を遡ることがむづかしいであろう。ただ、この像が、たまたま、そうした傳統を傳える例で、木下川薬師佛縁起

挿圖 10. c 同下半身

すなわち、私は、前掲^{註六}論文において、鉈彫の起源は、あるいは、半作の像を見て、その荒

々しい鑿目のある像が、東國人のところにびつたりとあい、それが流行するに至つたのかも知れないと書いた。しかし、これは東國にまわつてきた高僧の作つたこの種半作の像が、きれいに仕上げをした像よりも、強く、東國人にうつたえるものがあり、それが次第に様式化していったと考える方がよいのかも知れない。ただ、この推

に見るように、早く傳教大師の頃から、かかる風があつたとすれば、あるいは、この推定も可能かも知れない。

三

近年になり、鉈彫は、東國だけではなく、近畿地方にもある例として擧げられたのは、次の三件の彫像である。即ち、

- 滋賀縣甲賀郡甲賀町大字櫛野 櫛野寺 聖觀音菩薩立像 一軀 (圖版Ⅱ a)
- 吉祥天立像 一軀 (圖版Ⅱ b)
- 兵庫縣尼崎市 法園寺 (猪名寺) 薬師如來坐像 一軀 (圖版Ⅱ c)

等である。次に、これらを東國の鉈彫像と比較検討してみよう。

まず、滋賀縣樺野寺の聖觀音像（挿圖10・a b c）であるが、この像は、像高一〇二・四釐、ヒノキの一木彫で、兩肘先が別木になり、これが今日失われている外は、よく制作當初のままの姿で残っている。この像では、體軀と、天衣、裳の一部に、丸鑿のあとが残っている他、兩足も荒くほつたままになっており、兩足が二つにさえ分れない状態である。さて、この像も、もう少しで、普通のやや腰を

挿圖 11. a 十一面觀音像上半身

ひねつた觀音立像が出来るといふことは、誰の眼にも明かであろう。つまり、未完成の像なので

挿圖 11. b 全身 同十一面觀音像 新瀧寶傳寺藏

ある。ことに、この像では、常に頭部に重きをおき、顔はほとんど仕上りに近く、それに對し、頸以下は、まだ丸鑿の痕をとどめており、足にいたっては、まだ、兩足の境めをわずかにつけたという程度である。つまり上部より工作を進めている點が分るのである。その腕の部分はややあらけづりで、天衣や裳の部分には、あさい横縞目がみられるけれども、勿論意識的なものでないことは明かである。これを、比較的像様の似た、寶傳寺の十一面觀音像（挿圖11・a b）とくらべてみても、いかに、樺野寺像の鑿目（挿圖10・a b c）は、やがて、仕上げをすべきあとであり、寶傳寺像のは、縞目を誇示しているかが分るのである。また、兩者の顔を比較してみると、樺野寺像のは、すでに仕上げをほぼ完了しているのに對し、寶傳寺像のは、まことに荒つばい鑿目でおおわれている。にもかかわらず樺野寺像の顔に比べ、眼や眉や髭等がくつきりと墨書され、冠帶の上には、化佛まで墨でかかれています。また、兩者の足を比較してみても、樺野寺像のは、全く兩足が連絡しているが、寶傳寺像のは、足指まで作られている。つまり、寶傳寺像は、種々の點からいつて、樺野寺像よりも、工作が進んでいるのに、鑿目ははるかに多いのである。こうしたことは、樺野寺像が、頭部は、ほぼ完成し、頸以下は、もう少しで完成というところまでできており、足はまだ全く、未完成であるのに對し、寶傳寺像は、頭部以下、足に至るまで、一面に鑿目が残っているが、顔はこれを以て完成として

いるらしいし、足などは明かに櫟野寺像よりも工作が進んでいる。つまり、櫟野寺像は、未完成なのに對し、寶傳寺像は、これをもつて完成したものと見なしているらしいことを有力に暗示していないだろう。ちなみに、東國の鉦彫には、櫟野寺像のように兩足がまだ連続したような像は一つもないし、これよりもはるかに工作が進

んでいるものが多いことをつけ加えておく。櫟野寺の聖觀音像は、むしろ、東國の鉦彫像が一様式であることを立證する最も好例の一つといふべきであろう。

次は、同寺の吉祥天立像(挿圖12: a b)であるが、この像は、カヤの一木から刻み出された像高一〇〇・四厘の像。聖觀音像同様、兩

肘先を失っている他

は、ほぼ完全に残つて

いる。この像は、聖觀

音像とは違つて、顔

と、杳は、ほぼ完成に

近く、肘の邊と、頭部

の背面と腰裳の背面と

が工作がおくれている。

すなわち、胸の邊

と、頭部及び腰の背面

に、丸鑿の痕が残つて

いるのである。胸の

邊はさらにこのあと、

何等かのこまかい工作

をほどこすべく残つた

部分であろうし、頭部

背面や腰裳の背面は、

挿圖 12. a 吉祥天像上半身

挿圖 13. a 聖觀音像上半身

挿圖 12. b 同側面 滋賀 櫟野寺藏

挿圖 13. b 同腰部 岩手 天台寺藏

もつとも眼につかぬところであるから、おのずから、最後にまわしたと見るべきであろう。いずれ、仕上げの時には、全部けずりとるべき筈の未完成像であることは明かである。これなども、東國の鉦彫像が一様式であることを證明する一つであつて、本來、鑿の目が残るとすれば、この像のように、これから細かな工作をほどこすようなところとか、あるいは、眼につかぬ背面に多く残るべきである。ところが、東國の鉦彫の多くが、挿圖十三（挿圖13. a b c）の天台寺の聖觀音像のように、背面よりも眼につきやすい表面に鑿目を残しているのは、これまた、櫛野寺の吉祥天像が未完成像で、天台寺の聖觀音像がこれをもつて完成と見た證據であろう。

次に、もつとも最近に至つて問題となつた法園寺の藥師如來像（挿圖14. a b）の場合を考察してみたい。この像もまたヒノキの一本彫で、両手は後補であるが、膝部まで共木から刻み出しているのは、坐高四二・三厘の小像の爲である。彩色した形跡は全くなく、

挿圖 13. c 同 背 面

裏面にわずかに綠青のあとがあるのは、新補の臺座の綠青が、移つたものと考えられる。この像においては、ほとんど全面に、こまかい丸鑿のあとが見られる。ことに顔の側面と胸等の肉身部には、こまかい横縞目の鑿痕があり、衣文は、ややあらい鑿痕が残っている。背面も同様である。今まで、觀察してきた未完成の諸像の中では、この像が最も東國の、末期の鉦彫像に近いことは事實であるが、しかし、それらと比較して見ても、この像が、未完成像で、自から、それらの像とは違ふということが分る。その最も顯著なところは、法園寺藥師如來像の兩耳と、兩足である。法園寺藥師如來像の兩耳は、全くこれから彫るべき状態で残っているのである。東國の鉦彫像は、この像よりも、はるかにあらけずりであるが、兩耳は、ちゃんと刻まれているのが普通である。ちなみに、形相の似た萬藏寺の藥師如來像（挿圖15. a b）と比較してみても、萬藏寺像の方がはるかに耳や衲衣まできざまれているにもかかわらず、鑿の痕は多いということが分る。また兩足も、この像では、まさに指までこまかく彫り出すように指のところは、肉が厚く残っているが、全體的には、まだ矩形の板の状態が残っている。こうした状態のものも東國の鉦彫には見出せない。以上の諸點は、この像がまことに、東國の鉦彫像に近いが、やはり、これを以て、完成としたのではなく、さらに工作を進めるのが本當であるが何等かの理由で中止をした未完成像であることを雄辯に物語つていたのである。

以上、述べたところから、近畿地方にも鉦彫像はあり、東國の鉦

四

挿圖 15. a 藥師如來像 岩手 萬藏寺藏 挿圖 14. a 藥師如來像 兵庫 法園寺藏



挿圖 15. b 同 頭 部
彫と全く
同様であ
つて、こ
れらはす
べて未完
成像とす
べきであ
るという
説が、と

挿圖 14. b 同 背 面

うてい信じられないことがほぼ明らかになつたことと思う。未完成像と思われるものは、東國にも残っているが、比較的多く近畿地方に残っているのは、この地方が近世に至るまで、文化の中心地であ

り、造像のことも他の地方とは比較にならぬほど盛んで、佛像への理解や尊崇の念も、はるかに篤く、たまたま、未完成の像であつても、秘佛として、信仰を續けることが多かつた爲かと考えられる。

いままで述べてきた諸像のうち、温泉寺十一面觀音像も、金剛輪寺聖觀音像も、また法園寺藥師如來像も、今日も、嚴密な意味での秘佛としてほとんど扉を開くことがないことからこのことは想像出来る。

ただ私が、これらの諸像をまわつていゝうちに感じたことは、以上の未完成像がすべて、平安時代のものであり、その年代も東國の鉦彫がほぼ十世紀頃から、十三世紀頃までの間に限られているの一致し、造像法も、ほとんど一木彫でこの點も東國の鉦彫と同様であるといふ點であつた。

この一致は、私にしばしば、これらの諸像を截然と東國の鉦彫像と區別することを躊躇させた。しかし、このことは、鎌倉時代以後の寄木造と一木彫との製作上の違いにもよるものかとも考えられる。根本的にいつて一木彫の場合には未完成でも大體佛像の形になつてゐることが多いが、寄木造の場合には、その一部がなくても形をなさないのが普通である。また一木彫の場合には、一體の像にそう多人數で仕事をするには不可能なのに對し、寄木法が確立してからは、製作の分業が可能だけではなく、代行をも可能ならしめたと思像される。また一木彫の場合には、像様も様々で、かなり個性的な要素が多いのに對し、鎌倉以後は、おおむね像様は、型にはま

り、製作途中の像がたまたまあつたにしても、代りの佛師が、その仕事をついで仕上げをするということが、行われたのかも知れない。

さらに、平安以前の像は、調査もゆきとどいてゐるのに對し、鎌倉以後のものは、たとへ部分的に未完成のものがあつても、人々も尊重せず、注目をひかないために、われわれの眼にふれないということもあるであらう。いずれにせよ、この問題は、今後の問題として残しておき度いと思うが、まず、私は近畿地方に分布するこれらの鑿痕をはつきり残した諸像は、全部未完成像とすべきもので、東國の鉦彫とは、違ふことは、ほぼたしかであると考えてゐる。

註一 昭和三十三年九月刊 大野 晋氏「日本語の起源」

註二 昭和三十三年七月刊「圖説日本文化史大系」平安時代所収

千澤禎治氏「平安時代の彫刻」

昭和三十三年十一月刊「鎌倉の美術」所収 松本榮一氏

水野敬三郎氏「鎌倉の美術」

註三 昭和三十三年十月二日「神戸新聞」中の石田茂作氏談話

註四 明珍恒男氏「鉦彫に就いて」昭和十二年二月「畫説」二

註五 田中喜作氏「荒彫像の問題」昭和十六年十二月二月「畫説」六〇

註六 拙論「關東の鉦彫について」昭和三十一年二月「美術研究」一八六